

所属・資格 ドイツ文学科・教授

申請者氏名 大羅 志保子

研究課題		インゲボルク・バッハマン並びにドイツ語圏現代文学研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	申請者は、これまで何年かにわたりオーストリア出身の女性作家インゲボルク・バッハマンを中心に研究をしてきた。その際、研究指標のひとつに据えた「暴力」という領域を、バッハマンの多様なジャンルを包括する文学作品のみならず、彼女の博士論文やエッセイを初めとする理論的な著作をも視野に入れて検討する必要性を強く認識した。その見解に基づき、哲学やその他の学問分野を参照する過程で、バッハマンにみられる、たとえば「暴力」という指標で包括される領域が、バッハマン以後の女性文学やドイツ語圏現代文学一般の思潮やそれらの作品傾向にも顕在または潜在という形で認められることに気づかされた。本研究では、インゲボルク・バッハマン研究を中心に据え、さしあたっては、その研究に関連する領域を地平として、ドイツ語圏現代文学を構成する作家たちの作品を研究したいと考えている。
	研究の結果	バッハマンは、言語芸術としての文学同様、人文科学（＝学問）に対しても強い関心を抱いていた作家である。文学作品（＝芸術）の根底には常に透徹した学問的洞察がなければならないとの立場である。しかしその洞察は、より正確な論説の登場により反故にされる学術論文ではなく、あくまでも文学という芸術形態で表現されるべきである、というのがバッハマン詩学の核である。学問的な概念とは異なり、文学的表現がその時代の言説を超えて生き続ける（＝読み継がれていく）文学のユートピア性の主張である。このバッハマン文学の特徴を解明すべく、筆者がバッハマンの暴力についての洞察が、視覚と聴覚の可能性を動員し立体的に表現されていると考えるラジオドラマ『マンハッタンの善神』を研究対象とした。社会の慣習や道徳の枠にとらわれず「究極の愛」を追求する女性主人公が、善神と呼ばれる人物（宗教的要素）に抹殺され、裁判官（司法）の斟酌により善神が釈放される経緯には、自然権に基づく自由・平等の個々人が、自己の権利を守るために社会契約により形成した国家社会、つまり合理的で同質的な個人を基礎に置き、最大多数の最大幸福のために確立した法治国家が、それを脅かしかねない個人を抹殺してゆく過程や仕組みが多面的・多重的に表現されていることが確認された。
	研究の考察・反省	今回の研究では、バッハマン作品による第一次文献に加えて、第二次文献としてバッハマン研究以外の内外の理論書を参照した。さらに、これまで使用した基本的な研究書（Sigrid Weigel: Ingeborg Bachmann. Hinterlassenschaften unter Wahrung des Briefgeheimnisses, 1999 など）の読み返しと、新しく出たもの（Joseph McVeigh: Ingeborg Bachmanns Wien 1946-1953, 2016）も加えて、バッハマンの伝記的な側面に関する研究書を参照した。その意図は、上述したバッハマンの関心が、どのような社会的・人的脈絡により形成されたのか、即ち、文化科学的手法を取り入れた文学研究の試みとして、女性作家バッハマンの知識人としての形成過程を探求することにある。しかし、第二次文献が、C. シュミットの『政治的なものの概念』から H.アーレントの『暴力について』、『ナショナリズム』（橋川文三）、『共同幻想論』（吉本隆明）、『道徳の系譜学』（ニーチェ・中山元）、『象徴天皇という物語』（赤坂憲雄）、『システム社会の現代的位相』（山之内靖）に至るまで広範囲に渡ったため、第一次文献との兼ね合いにおいて、今後のさらなる検討が必要と考える。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 なし